人口資質の現状と人口問題

篠　崎　信　男

1　人口資質研究に当たっての発想基盤

人口資質という実在がはたして客観的に存在しうるものかどうか，また存在せしめ得られる実体かどうかは多分に問題とされねばなるまい．こうした論題を思索的につきつめてゆけば，田辺　元氏が「人間学」に対して問うた，哲学的人間学というよりも，人間学的哲学への指向という点で問題にしたものを再度，かみしめなければならなくなろう．しかしかかる思索は当然，人間というものについての概念構成を前提としなければ論理的に展開できないことではあるが，すでにアレキセス，カレルが人間生体についてみた「人間この未知なるもの」に対する生物学的追求によっても，その限界点があり，また個々人の生活体験から認識されるに至った人間概念にもさまざまな意見や解釈がなされうることも否定できない．

すなわち直接経験の認識も，間接経験の認識によっても制約が伴うことは必至であり，十全でないことは覚悟しなければならないが，こうしたことは未知の対象にいどむときは常につきまとう不安であろう．しかし学問的に追求する場合，自然科学，特に物化学では必ず座標的基準というものを定めて取り扱っているということが客観性を深めているが，この基本になる基礎的座標概念をいかに作るか，そのこと自体が本研究にとってはまたたいへんな研究課題ともなっているわけである．

故本多龍雄氏の昭和21年の「産児制限と社会主義[1]」では，はっきり優生学的考慮と価値を述べ，社会主義的新マルサス主義の有効な展開論をカウツキーを中心として述べていたのであるが，産児制限問題に対する人口理論的論策の中では若干，人口資質論的イデオロギーを秘めつつも，自然生物学的原則論と社会経済体制下の社会生物論との矛盾，かっとうを氏の言う階級分化の発展とかっとうを契機として浮き彫りにさせる中に人口資質の本態を見きわめようとする路線が強く打ち出されているように思われる．これを氏は近代人口問題の本質として捕え，さらに人口の生物学的破産という表現で迫ったようにも取られるのであるが，このことは資本主義経済体制下の人口資質問題は，人口が持つ資質の培養，開発という視角よりも，その活用効率化問題として捕えられてゆく必然性を示し，社会主義経済体制下においての本問題こそが，資質の向上開発を期待できるという意味を示唆せんとする傾向を示していると言える．

特に，「階級分化の対立の中での運命共同体的意識内での反省に問題意識が成立することを根本としている」点は，必然的にその共同生活史的な背景を前提とする以上，どうしてもそこに民族共同生活体としての認識を要請せざるを得ないのであろう．ここに実は，人口資質問題が氏の諸論の中に胚胎していると見られるのである．

特に氏の近代社会の定義として受け取られる文章の中に，「資本主義的生産方法の発達が新しい民族国家の建設に新しい共同社会的結合の主体を再生し得た処に始まる」としている点に象徴されていると言える．

---

1)　厚生省人口問題研究所（本多龍雄担当），『産児制限と社会主義』（研究資料第4号），1946年9月．

ただ氏の「近代人口理論の史的展開[2]」の中では，人口問題こそが自然主義的精神の破産と歴史主義的精神の台頭を動機ずける格好の問題として述べられているだけで，産児制限問題を論述した諸稿程には人口理論的追求はなされていない．したがって人口理論的追求として若干資質論とかかわりあいを持つものは，やはり産児制限問題をめぐっての諸家の見解の中に当然出てくるマルサス論を中心にしたものに対してである．それは主として自然生物学的な原則としての増殖論に関心が集まるだけに，それと対比した社会経済体制論では氏の言う近代人口問題の本質は階級分化の発展とかっとうの中に求めるということになる．しかしなにゆえ発展とかっとうが起こるか，その主体，氏の表現によれば人間的営為，または人間的作為を人口の内側から説明する論理展開は見られていないのである．ということは常に人口現象は，これらの外囲的条件によって制約され規制された大半の結果的現象として包括的に思弁され，唯物史観的に理論化されていくからである．つまりそこでは人間の持つ自然生物学的な要素も，特に生殖本能さえも社会的理性によって変成され，または代置されるということで，人口資質理論そのものとの矛盾対立としてよりも人口存在を歴史的，社会的の諸制約的存在として捕えることの至当性が強張されているわけで，巨大な生産組織の中ではその自然必然的運動法則のために人口も単に一つの物的与件以上の何ものでもないと言っていることになるのである．こうした理論的主張は氏の一貫した説であるが，昭和21～23年ころの産児制限問題を論じていたときは多少とも近代市民的教養とか，市民階級の実践的イデオローグになったとかの，人口資質論に手がかりを与えるような見解も述べられていたのであるが，昭和24年における論稿[3]においては，近代合理主義精神の近代的限界を反省せしめる問題として捕え，人口資質的諸要因とのかかわりあい，特にその役割よりも，人口の苦悶という形で一括し，資質論的な配慮はかなり後退し影をひそめている．これは氏がカウツキー理論の洗礼を受けてから，人間とか資質とかはどこかへいってしまったようにも思われる．もっとも氏の巨視的俯瞰理論からすれば，ミクロ的な人間個人の社会的存在や生物系統発生理論が示す機能力などはたいした意味を持たない範ちゅうにはいってしまうかも知れないのであるが，わたくしの人口資質論は氏が近代社会組織の中に見た人口資質的極限がその終局こそが，実は出発点なのである．氏の人口理論の西欧社会に対する論策は自然主義理論，資本主義理論，生物学的理論と諸家の人口論を紹介批判しながらたくましく述べられ，啓発されるところが少なくないのであるが，個人の解放と自由への発展も，また西欧社会の近代産業革命による解放人口の吸収も西欧諸国の殖民～移民政策の風穴を無視しては論ぜられないのではあるまいか，西欧社会の産児制限問題と日本の終戦後の今日の産児制限問題との前提条件には異なったものがあることを知るべきであろう．西欧は解放化されたかもわからないがアジアは植民地化されたのである．こうした意味を含めての西欧人口理論をも批判推論して欲しかったように思う．

したがって社会経済的存在を介しての人口問題意識を唯物史観的に捕えんとするに対して，その存在が現実的には歴史的社会生物としてであっても，それに固着せず，むしろそれをふまえて，さらに人類生活史的の見地からも理論化そうという試みが，わたくしの唯人論的思考路線ともなったのである．もちろん，こうした唯物史観論も，18世紀からたくましく再びぼっ興したギリシヤ以来の物理理論や数学理論に負うところ大であるが，生物理論は1900年以後の発展であり，特にこの中での遺伝理論の開発は1936年以降においてたくましいのである．したがってこの生物遺伝理論が唯物史観論と

---

2) 本多龍雄，「近代人口理論の史的展開（一），（二）」，『人口問題研究』，第8巻第3・4号，1～29ページ，1953年2月および第9巻第1・2号，1～22ページ，1953年11月．

3) 厚生省人口問題研究所（本多龍雄担当），『産児制限問題の人口政策的考察』（研究資料第43号），1949年7月．

どういう対立をなすのか，ルイセンコ学説が破れた今日，唯物論のみで人口資質論を構成することが妥当であるか否かは反省しなければならない理論的課題ではなかろうか．つまり物体的属性は人口の巨視的現象論的研究において行なわれうる概念ではあっても，すでに氏の諸論にもあるように，歴史的，社会的の生成発展体としての人口，それだからこそ問題意識が階級的対立矛盾の中に露呈されるとする以上，それはもはや，単なる物的与件としてのみの，自然生物体ではないはずである．しかしこうしたことも自殺というきわめて直接的に人間的な行為自体をもディルケームやケトレーによっては「死の意志」の定義を入れない単なる自然物体にすぎないものとして取り扱われているのを見れば無理からぬマクロ的判断ではあるが，こうした理論のみでは人間に密着した，人口の資質論には適用できないのである．つまり人口現象を通してそれこそこれを媒介として社会や経済の体制を論じているようで人口体制を論じていることにならないのではあるまいか．人口資質の側に立つかぎり，社会や経済は一つの条件であり逆に媒介体にすぎなくなってくる．唯物史観論的反省もまた目標も，実はそこにあるのではなかったろうかと思われるのである．

人間を制約する因子は単に社会経済的体制，とりわけ階級分化の対立因子ばかりではない．そうした集団的表象に達する前に，具象的には周囲の人間関係があるし，その人間関係の中に特に取引関係を露骨に示したり，また結果論的に利害打算が意識化されたりする Proceess を無視することはできない．しかも問題を科学すればするほど，その手続きの因果連鎖反応への認識は重要である．また唯物論もこうした手続きの要素的連関があればこそ史的展開という意義が出てくるわけであり，したがって革命思想や変改可能という思想的基盤も培養され得たのではなかろうか．つまり因果を結ぶ紐帯の連鎖は画一的単純なものではないというところに人間行動や，人口資質の発現の困難性がある．階級意識一般も，こうした人間的労働の限界終局面において成立することこそ人口自体の主体性を中心としたいわゆる自立法則というものができるのではなかろうか．マルサスの人口法則も自然原理と食物の生産原理との不均衡をその基調としておるが，つきつめてゆくと，これは人間の生活空間の設計という局面，または時点から見た食欲と性欲との発現のアンバラを問題としただけで，生物学的発言をするなら系統発生論的には当然のことと言える．したがってこうした突っ込み方をするならコーホート別，年次別の人口のサイクルや生殖のサイクル，そして個体の本能の欲望サイクルまで対比して，どこにアンバラがあり，そのアンバラは時間的のものか空間的なものかの要素分析から始めて，マルサス批判をしないと人口資質論的には十分でない．他の諸家のマルサス批判の中での生物学的見解にしても，自然生物の淘汰均衡論を前提としているものが多く，これならば一つのダーヴィニズムの変形でさえある，メンデルの遺伝理論からの批判もここに出てくるし，その変異発現原則をどう考えるかも問題である．したがって自然生物学的な原則論を取り入れるなら，あくまでその原則座標の検討とその限界点を克明にしなければ理論に隙間ができることになろう，といって人間属性に対する要素を無視した形，たとえばデュルケームやモース，ケトレーの一連の理論構成，さらには最近アメリカに流行している行動力学的側面を中心とする文化人類学的諸研究のみで能事終われりとするものではない．人類が作った形態および諸体型を研究しても，それは文化遺態としての研究成果ではあっても生活者としての人類一般の集団表象にはならないのである．特に人口資質論から見ると，それは常に意識生活の外縁型に過ぎないと思われる．ということは確かに唯物史観主義的な進化論への批判という意味においては機能主義的人類学者の果たす役割は大であるが，クラックホーンが奇しくも言明したごとく，その base としての生体構造に対する深い認識なくしては人類学とは言えないという意味である．人類では自然物化学のごとく実験できえない代償として未開社会の文化構造を引例または野外調査をするのであるが，かつてミードがこの文化機能を中心としすぎたため，文化とは男に「はら

ませる働らきがあるのか」と問われたことは有名である．こうした誤りはマルサス，その他の進化論主義者も含めて，それらが社会経済体制という次元の中へ自然体制原則を持ち込んでどうするといった批判と対偶的に言えることは，自然生物原則体制へ文化表象体制を押し込もうとしても無理なことは言うまでもないということである．この自明の基本的認識さえ成立できないような学問体系自体が問題とされねばなるまい．まさに「学問の体系は虚偽への第一歩」であるといったニイチェの毒舌を待つまでもなく，またすでにこの生体原則と生活原則との矛盾対立的諸問題を性相から暴露したキンゼー報告によっても，進化主義や機能主義は批判されてもいるのである．つまり一口に言ってこれらの諸論は人間生活者的感覚や態度を要素としながらも，それの存在価値や総括論はほど遠い宇宙のかなたにおいて再編成され，特殊化された理論として打ち立てられることになってしまう．したがって方法論的限界に対する認識論からも，人類生活一般に対しては再検討の必要が出てくるし，またそうした内省があったからこそマルサス批判も可能になったと筆者は見ている．

ただ問題は批判は批判としても，それに対するにさらに人口自体より疎隔され，したがって人口次元より別な機構次元における問題に焦点がスリ替えられていってしまうところに唯物論的発言の致命的な宿論があるように思われるのである．すなわち現象生活形態をふんまえる以上，当然社会経済体制下の問題意識として階級分化の対立激化を大衆的行動現象として捕え立証することは当然の一つの方法論ではあるが，さらにそれを媒介槓杆としてというこの medinm こそが実は人口資質論的には重大なる酵母体なのである．しかし常にそうした仕方でのみのマクロ的追求理論しか残されえなかったことにも問題があるが，実はこの段階論法こそハーヴェイが無定見にガリレイ理論を生体理論へ持ち込んだ原罪なのでもあった．

もし現時点において唯物論的思考に基ずき人口の運動法則論について論策するとすれば質量とは運動の加速度と力との比率概念として成立せざるをえまい．とすれば，われわれは次のごとく述べざるをえなくなる．つまり人口運動の一つの指標として出生率の速度を取るとすれば，昭和24年～29年の出生率の加速的変動は 2.1，0.9，0.4となりほぼ1年ごとに2分の1の減速加速度的現象である．そこで $F=mG$ の原型式にして m を出せば，この時点における人口資質は1,000/0.5=2,000という数字が出よう．この2,000が質量ということになってしまう．つまりこのときの2千とは人口規模において2倍の質量ということを意味する．この解釈はまちまちになされえようが，しかも年次によっては一定せずその時々の資質が変換して決して力学的概念のごとく固定化した index は得られない．つまり，単純な概念数式で簡単に意義付けが割り出されるような直截的表現がむずかしいのである．物化学が取る方法論はその対象の全ぼうを求める手続きとして実験研究，方法論が発達してきたのに対し人口の場合は一応国勢調査によってある程度全ぼうをはあくすることができるということは，ある意味では物化学が問題とする方法論的諸条件をすでに包収消化した結果を持っているとも言えるのである．したがって物化学が到達せんとしているものへの理論的方法形式を，人口現象が別の仕方で得ているものに対して逆に適用するというとはいったい何を意味するものなのであろうか，われわれが今日安心して操作している統計理論式も実はケトレーの一般則が結果的に保証されているということが前提である．つまり数学的表現で言えば，ガロア群論という総体結果理論があるから逆にわれわれは平気で加減乗除しているのではあるまいかといったものと同断である．このことは方法論の一般化形式としてよりも解析方法論の一般化という意味であるといってよい．したがってある frame work での諸現象の一般化への到達論は，常に新しい方法論を要請しているということでここに苦心のいる点があり，この一般化への努力理論として自然科学はかずかずの方法論的イデアを具体化してくれたにとどまるだけである．ということもその実質素材は実験可能な物質としてであって，それこそ，人

口生体質と物質とが同範質のものか否かの検討を経て始めて適用するのが科学的というものである．

したがって単純なる無機物質実験理論から出た原則を複雑なる人間有機物質論へ適用することは体質上きわめて荒っぽい穴の大きな網で穴よりも小さい人間質をすくい上げようとする理論の適用化にすぎなくなる．つまり結果は同じことと言うことである．またもう一つは自然科学的諸方法論は一般的に言って目的論的背景を持っていないことがその特徴である．しかし人口自体の動き，人口を主体として考えざるを得ない人口資質論としては，人口が物体と同様に，ショペンハウエル式に盲目的志向にのみ生活体として動いているのかどうか，マクロ的結果現象としては，そう取られてもやむをえない形態が現象化されていたとしても，人口の内側から見る立場を取る資質論からは単なる物体のごとく，感情，意志，目的もなく動いていると考えるのは無謀である．

一歩譲って社会経済体制下の諸制約があり，そのために個人の意志や努力もその大きな文化力の前に消化吸収され，一般集団表象の一環として行動せざるをえない物体化現象となってしまうという理論化への正当性を認めるとしても，それは単なる自然界における物動現象とは異なる人働現象としてでなければなるまい．この意味で解釈すればディユルケームやケトレーの行き方はそれなりに一つの独自性を持っているとは言えよう．がしかしそれだからこそ，ますます人口問題は人口生物的危機としての問題意識を今世紀に露呈化してきたとは見られないであろうか，この意味では本多氏の言う唯物史観理論はそれが示す結論的指向として再び人口資質論からの再反省，再吟味を全幅的に要請している一つの媒介理論となってくるのである．

だが，そういうものが「唯物史観理論なのだ」と言えば，まさにマーガレット，ミードが犯した男性の文化的姙娠説やダーヴィンが犯したメンデル論の黙殺化にも等しい独善論となろう．

問題は一般理論の方法論的原則化に対するデカルト的再吟味であり，単なるコギト，エルゴズムの一般化は許され得ないというところに今日の民主主義的な集団了解がなければならないということなのである．サルトルが「存在以前の了解」と言ったものをも含めての人口資質論的反省が人口自体に立ってなされねばならないということなのである．こうした立場から見るとマリノフスキーや，レヴィ・ストロースの指向したものは確かに魅力ある業績ではあるが，再びここで構造主義とか機能主義とかの理論的側面に衝突する．確かに機能主義理論が目的論的思考を取り入れてきたことは人働現象に対する一つの接近でもあろう，が問題は文化の伝承形態やそれに対する適応，馴化の過程における行動の動機ずけ，意義だけでなく，さらに生活主体としての人口の自発的創造行動論の要素をどう導き出し，また発見し一般理論化するかということの方が人口資質理論にはさらに重大な関心事なのである．

既存理論のすぐれた特徴は人口論にとっても必要なことは言うまでもないが，その理論の基礎にあるもろもろの条件の困難性を克服しながら新理論形成を遂げるためには若干の軋轢と非難をも覚悟して研究してゆかねば到底，人口資質の理論化は不可能である．ということは理論的に固ったからそれを基にして研究するのではなく，むしろ，そうした理論的背景がないからこそ調査研究をするものだといった方が適切である．研究にはいろいろはいる道，立場はあるがそれが拡大，敷衍してゆく中に人口資質の本体論はしだいに浮き彫りにされてくるものと期待しその可能性を求めるがゆえに研究価値があるとも言える．これを別の表現で説明するとわからない本体そのままをわからないままにxとおき生活の場の中での諸関係，生体理論や文化理論，社会理論や経済理論，その他，人間に関係する諸理論の関係原則から，このxの答えが示されるという代数学的思考構念をささえとしているということでもある．事実，すでに述べた物体に対する質量概念も最初から示されえたものではない．諸種の物体の運動実験中に力と加速度関係の比率係数として示され，これがある一定の値を取り，それぞ

れの物質に特有的であることから質を示す量として捕えられたことに始まり，質量となったのである．ということが確実視されると，力とは質量掛ける加速度であるという逆念理論化が可能となっただけで物力学であればこそ到達し得たものとも言えよう．以上のごとくで必ずしも複雑な複合体としての人口そのものの資質がこの方向において理論化として捕えられるかどうか疑問であるが一つの代数方式試論としては努力する必要がある．だが具体的な人口統計資料からこれを割り出そうとすると，前述のごときむだな空転作業ともなりかねないうらみもあろう．したがって理論化を急ぐ必要もなく，また理論体系ができなければ資質問題を取り扱えないということでもないということが，期せずしてすべてを白紙にしする再検討論となり，それは同時に自然科学の第1原理や，文化諸科学の第1思考路線とでも言うべき基盤に立たせた根底の誘因なのである．

かくして，かかる発想基盤の構造機能論として，また再吟味の反省基盤として六つの構造器界をおいたわけである．すなわち根底的のものとしてⒶ人類生物的基本構造とその機能，Ⓑ日常生活行動構造とその機能，Ⓒ文化的諸活動構造とその機能，Ⓓ社会構造とその機能，Ⓔ経済構造とその機能，Ⓕ政治構造とその機能……でⒶ～Ⓒは主として個体的問題が主たる関心となるが，ⒹⒻは集団的諸問題が対象となるということである．またこれらの諸分野に対して取られる研究態度としては10項目の反省 shunt をおくということで，次のごときものを中心の支柱とするということでもある．

すなわち，① orientation，② preparation，③ incubation，④ analysis，⑤ synthesis，⑥ imagination，⑦ confirmation，⑧ hypothesis，⑨ action，⑩ satisfaction である．しかしこの試行で，はたして人口資質のマグマ的実体が捕えられるかどうかは今後の問題である．しかし前記Ⓐ～Ⓕの要因をⒶⒷⒸを一つの技術体系の範ちゅうで一括して捕えたとしても四つの成因のからみ合いを生物発生理論で理解しようとすると，実に81類型への認識と257の組合相を少なくとも検討しなければならないほど複雑多岐となる．抽象的一般化への困難性もここにあり，研究意欲性よりも前に研究絶望性の方が早く印象ずけられそうであるが，人間自体万変無限性ではないという前提のみが唯一の支持となろう．

以上の諸論は本稿が故本多部長の追悼論文であるため，できるかぎり本多理論との接触平行線を保ちつつ人口資質を取り扱う基本的な研究姿勢の自己解剖論であることを付言するにとどめたい．

2　現下の人口資質問題

理念的な諸問題は前節のごとくであるが，現実面として投げ出されている諸問題に対する問題点とその配列は，昭和36年の『人口問題研究所年報』に一覧表として企画化されているので参照されたいが[4]，既存資料や調査研究によって若干手がつけられているもののうち，特に問題意識をいだかせられたものについて述べると次のごとくである．

まず先進文明諸国と対比して立ちおくれているものに母子衛生を中心とする妊娠，出産に関する問題があり，妊産婦死亡率は最も悪く先進国が昭和38年出生10万対，すでに100を割り大半は40以下であるのに102.5であり，昭和40年に至っても87.6にとどまっていること，特にこの死因の中で妊娠中毒症，出血が異常に高いことは注意しなければなるまい，また乳児死亡率も下がったとは言え，まだ十分でなく，まだ肺炎，気管支炎，胃炎，十二指腸炎，大腸炎など全死亡率としては著しい減少を示す中で，これらの死因によるものが多いこと，また新生児固有の疾患という多分に先天性や内因性によるものの死亡率が高いことなどは日齢月齢別に見た乳児死亡率の改善の立ちおくれを示すものと言

4）篠崎信男，「人口資質に関する諸問題」，『人口問題研究所年報』，第6号（昭和36年度），71～76ページ，1961年11月．

うことができる．特に少産化した日本は，その産児調節にかなりの思い切った方法，つまり人工妊娠中絶もやってきたことを思うと，量的少産は常に質的安産によって補償された優生的配慮を伴わねば無意義となるおそれがある．特に乳児死亡率は所得の相関が明らかであるために，単に生物学的諸問題の範囲でのみの問題処理では解決できない実状にあることを銘記すべきである．こうしたことは乳児死亡だけでなく，10歳未満の児童死亡率にも尾を引いており，1～4歳の年齢階級人口10万対の死亡率も161.3で先進文明国の100前後の死亡率に比すれば高く，さらに5～9歳の死亡率も65.1で，他の先進諸国が高くても57以下であるのを見ると，やはり日本は立ち遅れていると言わざるをえないのである．特に死因中，全結核，赤痢，麻疹などが諸外国に比してかなり高いこと，肺炎，気管支炎胃腸炎などの死亡率の改善も遅れていることが目だっていることは前述した乳児死亡率と併せて社会衛生的施策も十分でないことが考えられよう．

したがって乳幼児に限らず，全死亡状況の中でも伝染病による死亡率は諸先進国に比して損色がある．このほか問題となる死因は中枢神経系の疾患，消化器系の疾患，性尿器系の疾患，自殺自傷によるものをあげるにとどめたいが，労働力質を阻害するものとして50歳前後から頻発する慢性疾病も軽視できない要因である．若年労働力人口の漸減傾向に対し中高年労働力の比重が相対的に高まりつつあるときに，この労働能率低下をひき起こす慢性疾病率の増加は男子にあっては社会，経済的諸生産能率の低下問題として，また女子にあってもこの疾病の早期化は質的に人口再生産の低下を余儀なくせしめよう．つまり慢性糖尿病や慢性腎臓病は巨大児的奇形や未熟児を結果する危険性があるからである．これと平行して遺伝的諸疾患問題，たとえば精神薄弱児特にダウン症候群などは突然変異による染色体数の異常によるもので，しかも一般に突然変異というものは5人の子供に1人の割合で突発しているということである，しかもこの突然変異は大半が悪質的なものであることを思うと，かかる遺伝性的な疾患対策もゆるがせにできない問題であろう．特に最近日本人は体力も頭打ちになり，また智能も停滞ぎみであることは人口資質がらの活力問題として，将来人口への遺産が不安となる．

1966年の農林水産統計によって，日本で生産される食物というものは全部食肉，貝藻類，果物，穀物なんでも計算し，それを科学技術庁の食品標準成分表によって，10種類の栄養素（カロリー，カルシウム，たんぱく質，脂肪，鉄分，ビタミン，A，B_1，B_2，C，D）に分解して再集計し，国民1人当たり1日の栄養摂取料として換算してみたのであるが，これはもし，日本がこの島国の中での食料だけで食べてゆかねばならないとしたらどういう点が問題となるかを一応はあくする必要があったからである．この計算で1人1日の標準量を100として過不足を見ると，なんでもかんでも食いつぶしたとしても不足を告げるものはカルシウムで94.7%，次がビタミンAで74.4%，ビタミンB_2が92.9%，ビタミンDが57.2%であった．つまり国民栄養的に自給自足は困難であり，満腹感は満たされようが，活力感に乏しいことが考えられるのである．まさにキンゼーが行なった社会批判「料理することばかりを知って栄養素を知らないでは人間にとって意味をなさない」という言葉は単に性問題現象にとどまらず日本の今日的人口資質現象にも当てはまるものではあるまいか．

3　資質から見た社会の近代化における適応問題

資質がらの社会近代化への適応問題の捕え方は，非常に困難かつ複雑な分析を必要とする研究である．まず近代化という定義さえ容易ではあるまい．ここでは概念的，現象論的にその一端に触れるだけであるが，人口と社会というものを措定して素朴に対比すれば，自殺現象をその結果論的に人口の不適応形態としてとる見方，と同時に逆に社会が人口に対して不適応を示すものとしての人口形態を犯罪現象として捕える見方と双方からの接近法がマクロ的に考えられるのである．本多理論の階級分

化の対立激化という概念構成も実はかかる現象のリーメス化として成立したものではあるまいか……と推察するのであるが，この人口現象の帰趨するところの意味が資質論から再解析されねばならない点と思われる．統計的に自殺現象の推移を明治3年より見ると確かに，戦争，景気変動，その社会経済的諸力の影響によって変動していると思われる傾向は否定しがたいが，昭和35年以後，特に昭和40年からの自殺現象は以上の諸理論では首肯しがたい動向を示している．ということは，過去に対して主要な動因として一般的に容認されていた要因自体の変ぼうということが再検討されねばならないことを物語っていよう．この一例として昭和30年までは自殺現象と人工妊娠中絶現象は常に相互交替的傾向としてマイナスの相関関係を示していたが，昭和35年からはプラスの相関となり，いまだその件数は有意的ではないが，その意味するものはしだいに有意的傾向を示しているということである．したがってここに資質論的研究を要請するものがあり，人口の社会への反応形態というものへの分析もまた不可欠となってきたのである．かく見てくると，ニコラス，ラシェブスキーが行なった中枢神経生物理論化への認識，およびさらには喙出理論（peck-order theory）などの理論的研究が再び問題化されることにならざるをえない．また社会の人口への不適応形態として見た犯罪現象にしても，また資質論からはその反応問題についての認識を必要とされるわけで，ことはさらに深く複雑となってこざるをえない．ラシェブスキーの精細な高等数理論の全ぼうは難解であるが，その初期の根本基念理論式が示すものから示唆されることは，一つの刺激に対する反応形式論で，

（1）　$E = a\ (S - h)$　ただし E は刺激の強さ

S は刺激量

h は閾である

この場合 $S \geq h$ でなければならないが，もし $S < h$ なら $E = 0$ となる．これが生体反応としての "all ar none laws" と言われるものであるが，この $E = 0$ とならないものこそが社会生物としての問題点として鋭く見つめなければならない人口資質的論策なのである．ということはある反応に対する神経そのものは自然原則として作動するであろう．しかし現実社会ではかかる具体的神経作用を与えずして，つまり $S < h$ の刺激素となるものが考えられねばならないからである．たとえば脅迫とか，恐怖的状勢などは感覚刺激の具体的な閾下刺激要因ではないかと思われる．つまり刺激伝達は多くのシナプシスの相関閾作用の関門を通りしだいに高次元への circuit へと送りこまれてくるが，人口資質論からは内発刺激の逆流伝達ということも考えねばならない．ラシェブスキー理論はこの逆流問題をこの次元的 circuit の識閾論の中に含ませているようであるが理論的にははっきりしていない．この E はすべての通路である神経繊維（fibre）が刺激された後最大限に達するがこの近似式は次のごとくである．

（2）　$E = E^*[1 - e^{-a(s-h)}/E^*]$

であり，これは（1）式へ還元できるものである．

すなわちかかる数理的方法論から見ると，無数の circuit やシナプシスなどの controller を社会階級別の作用要因と考えているようで，この機能の破壊，破滅にその組織体の問題点を見る態度である．すなわちもし資質論的発言をもって解釈すれば，マルサスが自然生物学的原則からのマクロ的終局体を捕えたのに対して，ラシェブスキーは自然生物学的原則，とりわけ神経生物学的法則を中心としたミクロ的機能の連関体として問題点を捕えようとしているといえる．したがって適応，不適応現象も内側から見れば，反応機能の連関や断続として捕える見方も出てくるのであるが，焦点をつきつめてゆくとこの h の上限，下限を社会的刺激要因としていかに発見してゆくかということにもなる．

かくして前章で触れたⒶ～Ⓕの構造機能論との連関に対する ciccnit 分析が残されてくることにな

り今後に残された問題点となる.

しかし以上のような自然生物学的な原則論のみを中心としての理論化は，はたして社会生物としての人口資質現象の理論化に一意的に適用できるものかどうか，個体的には快適と見える刺激反応も，人口総体では同次元的には対応しないことは個人優生と民族優生とは必ずしも同一路線上にないことからも察せられよう．さらに一段と理念的詮索が必要である.

4 将来の日本人体質への展望と反省

現下の人口資質問題は前節で述べたとおりであるが，かかる人口資質問題を提起し動機ずけた契機は終戦後の激しい変動速度に問題のあることに異論はないが，この内容を奇しくもクラッホーンがズバリと分類しており，それがあまりにも日本の昭和30年代の時代相とピタリとあてはまっているように思われるので以下述べることとする．もっともクラックホーンは次の要因を人口資質の変動要因として言ったものではない．むしろ経済的大混乱の前提として述べたものにすぎないが，人口資質のまなざしから見ると，それこそ人口資質変動反応の要因でもあるのである.

すなわち

(1) 先例のないほどの経済的発展
(2) 工業文明が持つ humen problems に対する注意の欠乏
(3) 都市の社会組織が持つ非人格性
(4) 機械的坩堝機能が持つ反人格性
(5) 一時的，地理的な住宅状況
(6) 社会移動が示す非人格性
(7) 宗教的信念の弱化

等であるが，クラックホーンの憂慮は機械主義，物質主義の科学では健康な社会秩序や本質的な深い生命問題に対する Orientation は与えることができないということにあり，しかも現状の混乱原因の一つは不均衡な技術発展で，この発展にテンポのみを与えてリズムを否定したからだと論述していることが，実はそのままわたしのことばにもなってしまうのである．ただ日本の場合での考察は，人口密度が高く，したがって圧縮凝集された形での以上の諸要因は，人口資質の転換爆発を誘発するおそれなしとしない点が異なっていよう．クラッホーンの文化理論的指向は，わたくしの人口資質論形成に対してかなりの比重で影響を与えずばおかないような卓見が多い．アメリカ人気質というものを分析し問題点を示しているが，理論的なねらいは economical determinism と psychological determinism の中間コースの中にあるようである．しかしノースロップも指摘しているように，一つの文化が他を破壊するかあるいは新しい cultural assumption の set が対立的な諸問題において価値あるものを吸収し調整するように展開するのでなければ，いかなる均衡も可能ではあるまいということは，日本の現在の社会状況の中でも通用する注告なのではあるまいか.

以上のような諸見解から見るかぎり，日本人体質も，この混迷の中で若干磨滅する危険性なしとは言いきれない．たとえば，戦後の回復によって身長，体重も増加してきたが，この内発刺激は通婚圏の拡大を前提としなければ実現できない自らの限界というものがあるはずである．しかし，通婚圏は戦前に比べて人口の激しい移動にもかかわらず，大幅な拡大率は見られえないのである．また人口体質の培養体の役割を果たす家庭機能というものが，しだいに学校教育機能や社会的諸機能にとって代わられつつあるとき，しかも経済的機能がさらに強力に作用すると見られるときに，mental force というものが physical force と均衡を保って発展しうるかどうかをも資質上問題となる.

ここにどうしても，社会開発と同時に人口開発に対しても留意するところがなければ，人間力の充実は期しがたいのである．特に創造性的進発力に人口資質の向上ルートを見いだし，これを推進させようとするとき，一方において，社会経済的諸力が，平均値的人間と流行的人間をのみに方向づけようと作用する場合は，さなきだに自然生物学的遺伝予測が示す頻発する好ましからぬ突然変異を始め，社会の負担となる人口の増加率が予見されているとき，人口資質開発はきわめて重要な第一義的な問題である．問題提起はどうしても悲観論的例証になりやすいが，ハーマンカーンの日本人への過大な期待評価もあることを見れば停滞ぎみの人口能力を発揮せねばなるまい．新分野への突入は，かつていかにして新理論を見いだしたかの問いに対する Einstein の答のごとく，まさにそれは"By challenging on axiom"（自明の理への挑戦）なのである．

追悼論文を書くに際して

故本多龍雄人口政策部長の追悼論文を書くに当って，若干本多氏と筆者との出合いの思い出をたどって書くことも追悼という意味合いで必要のことと考えたのである．ということは文章に示された氏の論文調から察せられる人間性以外の本多氏の人間像が浮きぼりにされることは，個人的関係から見たものが最もよく，生前の人となりが紙面に出るのではないかと思う．といったからといって必ずしもよいことばかりを書くわけではないが，少くとも氏を知る人にとって懐しさが滲み出るような散文調で綴ることにしたい．

私と本多氏との最初の出合いは多分昭和18年6月20日頃と記憶する．現在の平河町の参議院の議長官舎が建っている処に以前は海軍省かのオンボロ平家建の木造建築があり，何か小学校を思い出すような建物が当時の人口民族部の研究所であった．私は民族第4班に属し主として民族問題，混血，血族結婚などを中心とした人類学的研究に専念することになったが，便所が建物の外に一戸別棟であった．私の室は入口から比較的近くまた便所も廊下を距てて近かった．この日便所に行こうとして廊下を出ると本多氏の室は廊下のつき当りにあったが，ヌッとばかりドアのひさしに頭がつかえるのか，くぐるようにして出て来たのが本多氏であった．「でかいなー」と思った．特に私が小男なのでそう思ったのかも分らないが一緒に便所に行って並んで再びびっくりした．「あー君か今度入った人は」なんて上から見下ろされ，当時氏は高等官であったためか馬鹿に偉大に見え，しかも一高の先輩と聞いて，内心困ったとも思ったものである．余り人に会いたがらない人柄なので，平河町時代は終ったが，次が竹橋（今の労働省）へ移った時である．この時厚生省の体力関係の会合と思うが始めて中村孝也先生と若僧の私が肩を並べて講演したことがあるが，そのレヂメが送られたので各先輩諸士に配布した時，本多氏の処へ持って行った．その時若干話をしたが，平河町で鼠の実験をやっていたので，白鼠はどうしたと鼠のことばかり引越しで心配してどうも学問の話にはならなかったようである．次が目黒へ引っ越し，聖心女子学院時代である．室が狭くなったので一寸，顔を出せば見える処に氏はいたが，満州へ出張することになって挨拶に行ったが，この時は満州は未だ内地より食いものがよいだろうと，これも食物の話ばかりで学問の話にはならなかった．それから次がいよいよ松本疎開で私は先発した．松本も食料難で私は知人を頼ってはサツマイモを買出しに行ったりして自炊しなければならなくなったが，東京も空襲が烈しくすべて松本へ疎開となって次から次へと研究者が出張して私の許へ様子を見に来ることになった．ある日，本多氏がヌーッと入って来た．そこで苦心して買い出しに行き，手に入れたサツマイモをふかして出した．それは私の夜食分も入っていたので一皿かなり大盛りであったが，氏は黙って座ったまま，「おいしそうだね」と言いながらムシャムシャ食べ，まさか15本も食われるとは思わなかった．さりとて引っ込めるわけにも行かず，いい加減で遠慮するだろうと思ったらさにあらず「うまい，うまい」で全部食べられたのには参った．余程飢えていたに違いなかったのであるが，とにかく沈黙のままパクッパクッとゴトゴトと茶を飲みながら食べられたことを思い出す．体も大きかったから無理もないが，更に側らにあったトマトときうりをもカリカリムシャムシャ食われたのには閉口した．恨めしかったが途中で詮めた．そして最後の言葉が印象的である「これで松本まで来た甲斐があったよ．篠崎君のお蔭で久し振りに

満腹した．ウフフ……」，これにはグーの音も出なかったことを思い出す．しかし当時氏は栄養失調とかで両脚がむくんでいたことを，あとから聞いて，サツマイモでそれが少しでも治るものならよい供養をしたと思っている．

さて，いよいよ終戦となって研究所は田町の吹きさらしの寒々とした建物に移った．当時本多氏は中々姿が見えなったが，その頃奥さんが亡くなられたことを聞いたものである．世の中は戦争直後の慌しい空気に包まれていた．そして研究所にも民主的に職員組合が出来ることになり，最初の打合せ会が開かれたが，その時が戦後再び本多氏と顔を合わす機会となったのである．当時，故中島龍太郎君と私など若手グループが生残ったが，初代の支部長に私が推され，また同時に本省の職員組合の組織委員長などにもなったが，たまたまこの状勢の中で多分，庶務課の若いものが組合に反対の意を表し悉く対立した委員会になったことがよくあった．その時，本多氏は多分中央委員であったかと思うが，合同委員会を開いた時，この庶務課員との対立がはげしくなった時，本多氏が，民主的に討議したものにイチャモンつけるとは何事か……といった一喝をやったことがある．そしてフラフラしていた若いものをどやしつけたはげしい言句をはいたことが心に残っている．更に，大衆的に決議したからには自動的に委員長の指示に従うのが当然だとして助言してくれたことを思い出す．あの無口な氏が大声で一喝したことは天にも地にも私が耳にしたものではこれが最初で最後ではなかったろうか．戦前は何時も食いものや鼠の話ばかりであったが，この組合運動を契機として次第に人間的な，更に学問的な交流が始まったわけである．寒い田町を去って研究所も田村町1丁目の日産ビルへと移ることになった．全く当時は宿なし放浪者みたいに1年に1回位の割で引越しばかりやっていたが，この引越しでは常に労働者並みで大変である．当時私は調査部の第3，4科の両方をやらねばならず，男性は私1人で，あとは女ばかりであった．本多氏は調査部長になったばかりの時であったが，誰れも氏の机や道具を運ぶものがなく他の科には男もかなりいたがかまうものがない薄情もの揃いだった．そこで私のところで日産ビルまで運んだが問題は調査部長のいる空間が狭くて取れないのである．私の割り当て空間に入れようとしたがうまく行かず，机も椅子もどうしょうかと思ったが翌日雑然とした処に6尺豊かの氏がヌーッと入ってきた，事情を話して暫らく私と机を並べて其処に我慢して貰う外ないが衝立やその他雑具の始末が上手に行かない．すると氏は「私のガラクタはかまわんから廊下にぶん投げておいてくれ」と怒った顔付であったが庶務課員は以前の一喝問題があるので誰れも部長の面倒を見ようとしないのである．庶務課というのは当時はかなり封建官僚的な面が強く直属の上の者にはペコペコするが研究者に対しては冷酷であった．従って新米の本多部長を放ったらかしたのであるが，これには委員長として私は当時の岡崎所長に文句を言ったものである．そして室の割り分を変え，ドアを閉め切ってようやく入口の処に部長室らしいものを作った事を憶えているが，その時，本多氏は一番喜んでくれた．当時，私は盛んに産児調節の実態調査をやっていたがこの時から氏も本問題に対する理論的研究をやっておられ，これをめぐって私とはよく議論したものであった．この頃氏は産児調節問題に対する一辺倒的な空気に対して批判的であり，よく注意されたものであるが，多少私事にわたって恐縮だが私も氏に対して注意したことがある．これは氏の再婚問題に対してであるが，「面倒だから先方に任せ切りなのだよ」といったので一度位いは本人を見て確めるべきだと強く言ったものである．何か自分の事になると少し甘い感じのする氏であるが，これが氏の特徴でもあり長所でもあって私ごとには非常に寛大である．そのために最も大切なことを見落してしまう危険性もあるので私なりに注意したが，やはり結果的にはこの再婚問題は上手に行かなかったことを故中島君から聞いたことがある．つまり私の意見に従わなかったので私には言い難かったのであろうか中島君には〝「これには参ったよ，別れたよ，だが篠崎君には黙っててくれよ……」といっていたが本多先生余程，君の忠言にこたえたらしいよ〟とは数年後故中島君が研究所を去ってから聞いた言葉である．氏はこの頃から唯物史観の哲学に深く入っていつたようであるが，私は田町にいた頃から私なりの人間問題観を抱いていた シェラー，ニイチェ，パスカルなどを読んだのもこの頃であったが，特にシェラーの原本を本多氏が貸してくれたので，その調和的人間像に対して一種の批判論文を書いて本多氏に渡したことがあった，この時の氏の思想は Ungern-Sternberg の「生物学と経済学」を消化し生物学に対して一種の不変性というものを認識してはいたが，それよりも氏の

頭の中には歴史社会史的な制約性というものに目が向けられていたように思う．氏独特の表現「近代」的心術などというのもこの時生れたものであるが，はっきりした産児調節問題に対する理論的原型は「民族立法としての人口政策」の編著に見出されるといってよい，〝人間的営為〟という表現もこの中にあり，この時は人口現象そのものの中に歴史社会的実在を信じ，これの文化価値的問題をめぐって人口問題が出て来るとしていた．従って此処での諸論は社会経済は一つの条件でもあったのである．この点で，私がシェラーを批判しながら，氏の営為に営働論を打ち出したものとは近似していたのであるが，私が氏の言う近代化とは人間疎外化であるといったことが別の意味で氏のかんに触ったらしく「君の書く文章は日本語になっていない」と強くやられたことを憶えている．この時から，人口問題論議で私の思想的背景と氏の思想的背景とに溝があることが分ったのである．この後氏はカウッキー論の洗礼を経てから，以前の人口自体の中心価値論から次第に運命共同体意識内における反省問題としての人口論へ傾斜して行ったようで此処に産児制限問題に対してはその思想史的背景の重大意義を説くようになっている．従って「産児制限問題を主題とする若干の人口理論的省察」が一応のまとまった氏の本問題に対する思想論文の代表的のものといってよいように思う．

私が氏との議論において常に溝を感ずるのは産児制限というものが氏の言う近代市民階級の実践的イデオローグになったというその内容で，それへ私が接近するために私なりに「産児調節と性生活の実態」と題する著書の中で本多理論の裏打ちを県命にやったのであるが，人類遺伝学諸論，人類系統発生理論からの比重がなく自ら其処に一線が残るのである．つまりネオ，フロイドイズムに発する人間関係諸論も，思想史的背景及び社会経済条件として一括されたため不分明で，ただ僅かに階級分化の発展と葛藤からのみ近代人口問題を見ていたということである．この唯物史観に対してはもっと自然科学的認識や，特に人類史的見方が産児制限には必要ではないかと思い，唯人史観をたてて議論したことが別の意味で私を思想的，哲学的，思弁的な学問へと駆り立ててくれた．この氏の刺激や批判は私の人口問題研究に対する狭さをある意味では拡大してくれた事は事実である．私が学位を取った時も氏は逆語（御めでとうと言わない方が良心的だ）で批判したが永井先生が「本多さんはどうしてあんなことを言ったのかね」と聞かれて私はすぐその意を答える事が出来た，従って若干のズレはあったが，氏の諸論の中の人口危機感に対して，特に氏はこれを人口の生物学的破産として捕えている点で私の見解と再び一致が見られて来たことは幸であった．サルトル論を氏にぶっつけたのもまさにこの時であった．

私が部長になってから1年後，人口資質理論の検討を始めた頃「君もそろそろ見え始めてきたんだなー」と言ったのが本多氏との最後の議論のやりとりであった．

故本多部長は珍らしい人物であるとは一つの本多的風格があり，特に女性の中では違った意味での関心があったように思われる．特に組合運動華やかなりし頃は組合主催のパーティーで象のもの真似が当り拍手喝采されたことなど氏の一面を示すものもあるが，とにかく深く静思するタイプで，その一言にかなりギクリとするような重さのある発言が多かったように思う．たとえば私が性問題の実態調査をやり，かなり思い切ったことをやって発表し，いろいろとある筋からは目が光り睨まれたことがあったが，そんな時に，氏は，「科学とはある意味では暴露することだよ」と言ったことなどその例であろう．

氏の論述文にはかなり難解な文章や文字があるが，実に氏にして言い得る独特の味がある．私は氏の諸論が常に包摂的，総括的の思弁論が多いので，特に，その条件論とかprocess論を如何に考慮して推論しているかが具体論との対決という意味で興味があったが，一例を紹介すると「如何なる社会経済的構造連関と，とりわけ如何なる社会階級的構成と分化を現実の槓杆として貫徹されたものか云々…」また「無条件的な共同社会的強制に替って個人の自由なる意思とその決定を媒介とする間接的な作用が支配的なものと云々…」つまり氏の言外に言わんとする具体的な内容を秘めている表現が，この槓杆と媒介という中にある特別の言い廻し方なのである．こうした特徴ある文章はただ表面的な現象推論からではなく氏の哲学観から出ており，かなり考えた末の表現のように私には思えるのである．この意味で単に非常に適切なよい文章表現があっても無定見無理解にこれを借用することを私は常に戒めている一人である．

氏が一時痔の手術で東大病院に入院したことがあったが，この頃から貧血病を中心として氏の健康は著しく弱ったのではないかと思う．見舞に行った時，係りの医者が氏が一言も口を聞かない沈黙者のため「哲学者とはこういうものか，淋しくないのかなー」などと半ば驚き感嘆していたが俗物とは語りたくないという孤高の魂の身についた人でもある．

故本多部長の出合いからの思い出話を前提とし，今後，それこそ氏の言う典型的な，このような珍らしい人口論者が出るか……なかなか得難い人物を失ったものと思うが，更に個人的な感覚から言うと，故本多氏の稀少価値は氷雪のような人物でもあるということで，周囲が寒く雪がコンコンと降っている状況下では彼の雪の家の中は暖かく寒さを防ぐことが出来るふところの広さがあり，外況が暑くてやり切れない時は，彼の雪の家はサーッとした涼しさを与える鋭さと冷温があるということである．惜別の情を禁じ得ないが，本論を執筆するに当たり氏への印象論を書いて，人間的な追悼情緒散文としたい．

Actual State of Population Quality and Population Problems in Japan

Nobuo SHINOZAKI

This essay is published centering arround the theory developed by discussing in corresponding with late Honda's theory which indicate that the essence of population problems must be found in the confrontation and complications or friction between social classes. If I am allowed to point out the merits of his theory, I think he has given the new defining to family planning or contraception from the view-point of socio-economical field by overcoming through the social theory of Kautsky. Namely I would like to attach importance to his developed one as one of cultural mordernization theory escaped from the only social classical theory. That saying as above would mean the historical materialism have been obliged to be limited in order to apply to the problems concerning the population quality or man power. Therefore this point is my start to make a new theory for population quality and then it becomes necessary to involve the biological factor, especially the hereditary idea or human genetical one, socio-economical psychology, their behaviourism, Anthropological one and etc as the factor of population quality.

At this point it must be wanted and necessary to arrange the frame-posture as a premise for the base of original idea. Then it is as follows.

(A) The fundamental structure and function of human biology
(B) The general structure and function of daily-life action
(C) The cultural structure and function from folk-lore, custom, others
(D) The social organization and function
(E) The economical structure and function
(F) The political structure and function

(A), (B), (C) idea means the subordinate or latent ability or function but basical and rather centering around individual significance, and (D) (E) (F) the higher-ordinate function. In order to research this problems of population quality, considering the interaction of above 6 structures and functions, I must proceed reconciling reexamining and, introspecting about next 10 items and also must be rather maintained by these key-fulcrum. This is my way to make new theory of population problems.

However so, we are always actually facing the problems of quality, -for instance hereditary disease, perinatal death, abortion, eugenic marriage, suicide, accidental death, chronic disese of more than middle age, quality of labor force, wrong doing of youth or criminal phenomena and so on.

In another word such an actual problem will be considered and induced from the breaking down of balance between the speed of technological innovation and the change of social system and the chronological merit of human being or human value. Thus I must begin new way by challenging on axiom as said by Einstein.